

南京国际和平通讯



Nanjing International
Peace Communication

「南京國際平和通信」

主催：侵華日軍南京大虐殺遇難同胞紀念館

編集：南京大虐殺史及び国際平和研究院

13

Sep. 2020 Issue 13

和平

Peace



2020 年第 13 期 「南京国際平和通信」

ガイド

- 国際フレンドシップ・デーは、花言葉で平和を伝えていく
- 中国南京の学生を対象とする「旅立つ前の授業」：平和の種を世界各地に撒く
- 在上海アイルランド総領事のテレーズ・ヒーリー氏 (Therese Healy) が記念館訪問

2020 年 8 月 第 13 号

編者による言葉

親愛なる読者へ：

先月、南京外国語学校の高校三年生 40 名が記念館を訪れ、国際平和学校の交流活動に参加した。彼らは間もなく勉学のために、国内外の大学に進学、平和の「種」を世界各地に撒き始める。また、在上海アイルランド総領事のテレーズ・ヒーリー氏が記念館を訪れ、歴史を銘記すると同時に、平和を大切にするという念願を表した。

特に注目すべきは、今年の国際フレンドシップ・デーに、記念館が「南京大虐殺史実展示会」の「人道主義の救援」エリアで、花言葉の展示を行い、83年前に困難や危険をものともせず、南京に残り、25万人以上の中国難民を援助した、国際友人25人に感謝を表していることである。

今期の「南京国際平和通信」は約2500字で、3分程で読むことができる。

ヘッドラインニュース

国際フレンドシップ・デーに花言葉で平和を伝えていく

7月30日は国際フレンドシップ・デーであった。午前9時、記念館は「南京大虐殺史実展示会」の「人道主義救援」エリアで、「義士と英雄に敬意を表す花言葉の展示会」の開会式を行った。

風も生臭い南京大虐殺の間に、ジョン・ラーベ氏、ミニー・ヴォートリン氏、ベルンハルト・シンドバーグ氏など25名の国際友人が、命の危険を冒して南京に残り、中立国の国民と国際赤十字会委員などの特殊な身分を利用し、南京安全区を設立し、25万人以上の中国難民を保護した。今日、私達は花言葉で平和を表し、義士に敬意と感謝を伝えていく。

開会式の会場には、砕いた瓦の散在により、南京大虐殺の苦難の日々に、破壊されて廃墟した南京市を象徴し、瓦は、「母

の愛」を寓意する苔で覆われ、大地の千古不易である「母の愛」を象徴すると同時に、新生の意義も持っている。現場の25組のスパティフィラムの分布は、南京大虐殺の期間に、25名の国際友人が南京安全区にて設立した25ヶ所の難民営の地理分布と呼応している。

記念館の張建軍館長は、「花言葉という儀式的な教育を通し、歴史やゲストと対話している。展示会では、暗い歴史の写真と、香りと色鮮やかな花との対照によって、歴史と平和の物語を世界に伝えていく」と語った。





速報

中国南京の学生を対象とする「旅立つ前の授業」 平和の「種」を世界各地に撒く

7月7日と8日、記念館は特別なゲストを迎えた。南京外国语学校の高校三年生40人が、世界各地の大学に行く前に、紫金草国際平和学校の二日間の「旅立つ前の授業」に参加した。

開校式では記念館の張建軍館長が、「世界各地に勉学に行く前に、この痛ましい歴史を忘れず、勇気と思いやりを持ち、平和の種として才能を生かしてほしい。南京は中国における最初の国際平和都市であり、君達の根でもある。南京市民の歴史を忘れず、平和を愛するという理念を世界各地に持って行ってほしい」と懇切のあいさつをした後、学生たちと交流した。

「当時、父は日本軍に捕まって行方不明になった。その後、死体の山の中から父を見つけ、悲しくて号泣した……」南京大虐殺生存者の写真の壁の前にて、92歳の高齢の生存者である艾義英氏は学生達に、自分の家族の83年前の南京大虐殺の時の悲惨な境遇を回顧した。

李艶鴻さんは間もなく米国に留学する。彼女は、「私達の学校の校訓は、『中国の魂、世界の心』である。私はこの校訓を実践することができることを望んでいる。米国への留学でこの歴史の真相について、外国の友達と交流しようと思う」と述べた。同様に米国に留学する周于行さんは、「故郷の最もリアルな歴史をクラスメートや友達に教え、南京市民が平和を愛するという理念を世界の人々に伝えていきたい」と語った。



在上海アイルランド総領事 テレーズ・ヒーリー氏が記念館訪問

7月24日午後、アイルランドの上海駐在総領事、テレーズ・ヒーリー氏（Thease Healy、中国語名：何莉）は侵華日軍南京大虐殺遇難同胞記念館を訪れ、張建軍館長と対談した。

張建軍館長は何莉氏に、簡単に記念館の建設状況と、南京大虐殺史と国際平和研究院の近年の研究状況を紹介した。何莉氏

は、「アイルランドは独立戦争の時に、イギリスの植民地として支配され、国民は悲惨な生活を送っていた。独立を勝ち取るために、アイルランドの国民は色々な悪戦苦闘をした。そのため、中国人民の侵華日軍に虐殺されたことについては、アイルランド国民は深く感じられる」と話した。

対談が終わってから、何莉氏は「南京大虐殺史実展示会」を見学した。史料展示館の最後のホールにて、彼女は「平和」という刺繍作品の「平」の字に、いくつかのステッチを添えた。彼女はまた記念館の祭場に行き、南京大虐殺の犠牲者に黙祷し、白菊を供え、瞑想館のゲストブックに感想を書き加えた。

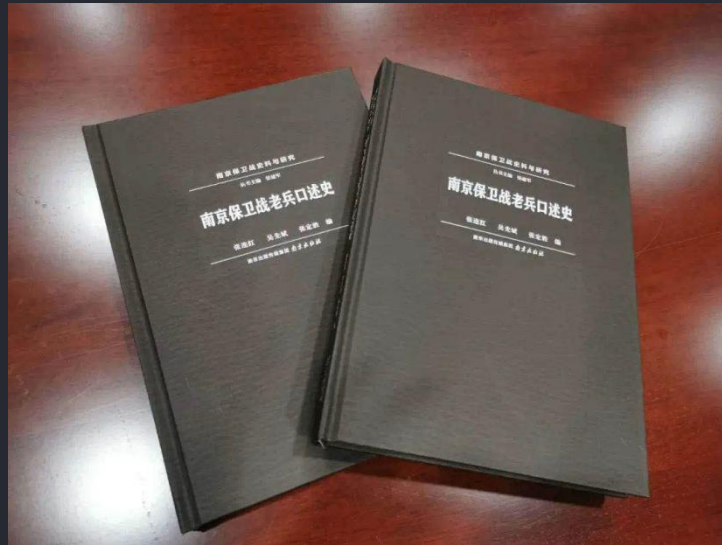


25名の抗日戦争の老兵は南京防衛戦の歴史を振り返る

7月5日午後、『南京防衛戦の老兵の口述史』についての座談会が中国南京にて開催された。この本は25名の抗日戦争の老兵の口述資料を収録し、南京防衛戦の細部まで忠実に再現している。南京防衛戦の最高指揮官の唐生智氏が、最後に包囲を突破した場面もこの本で初めて披露された。

この本は、南京防衛戦の歴史を研究する上で重要な価値がある。25名の老兵のうち、今でもご健在な方は3分の1にも満たない。

2018年、南京大虐殺史と国際平和研究院は中国第二歴史資料館、江蘇省社会科学院歴史研究所、侵華日軍南京大虐殺遇難同胞記念館などと共同で、「南京防衛戦史料と研究」シリーズを発行した。この本はシリーズの中の一冊である。記念館の張建軍館長は、「3年から5年の間に史料を作成するつもりである。南京防衛戦の遺跡に関する調査レポートと『南京防衛戦全史』が含まれる」と述べた。



95年生まれの韓国の少女・姜哈娜さん 記念館で国際ボランティア

「これは第二次世界戦争の写真である。写真の中には、愁色をたたえ、お腹をなでている女性がいる。彼女は朝鮮籍で、日本軍の慰安婦制度の被害者の朴永心氏である。」7月16日、記念館のスタジオにて、韓国から来た国際ボランティアの姜哈娜さんが、朴永心氏の悲惨な遭遇を録音していた。

この1995年に中国で生まれた韓国の少女は、2017年に記念館の分館——南京利濟巷慰安所の旧跡を見学した後、内心の恐怖と悲しみを抑えることができなくなり、国際ボランティアとして自分の力を発揮しようとしていた。

姜哈娜さんは、毎回の解説に真剣に対処する。彼女はいつも解説の一日前に展示館に来てもう一回見学し、下準備をしてか

ら現場に臨む。彼女はこれまですでに 10 個の韓国団体で訪問者 300 人余りを案内してきた。

このような悲惨な歴史に直面し、「絶対に逃げてはいけないし、絶対に忘れてはいけない。過去に直面して記憶し、絶対轍を踏まぬようにする」と姜哈娜さんはしっかりと語った。

温もり

日本軍「慰安婦」制度の被害者の駢煥英氏 誕生日を祝う

7月11日は日本軍の「慰安婦」制度の被害者、駢煥英氏の92歳の誕生日であった。記念館の職員が南京から山西省沁県の暖泉村に赴き、駢煥英氏のために長寿をお祝いした。駢煥英氏は足が不自由なため、長い間臥床しているが、家族の優しい介護で元気になっている。当日、彼女の子供は誕生日の宴を催し、記念館も誕生日ケーキを用意した。いつまでも健康でいられるように。

記念館の職員が海南省で 日本軍の「慰安婦」制度の被害者を慰問

7月28日から31日まで、侵華日軍南京大虐殺遇難同胞記念館の職員が、海南省の澄邁県万寧市に赴き、「慰安婦」制度の被害者李美金氏、王志鳳氏、陳連村氏をお見舞いした。彼女たちは非人間的な試練を受けながら、今も楽観的で積極的な態度を持っている。記念館は5年連続で海南へお見舞いに訪れているが、今ではそこに、日本軍の「慰安婦」制度の被害者は3人しかいない。



李美金氏の写真（中）



王志鳳氏の写真（中）



陳連村氏の写真（中）